

赤い船のお客

小川未明

青空文庫

ある、うららかな日ひのことでありました。

二郎じろうは、友ともだちもなく、ひとり往おうらい来らいを歩あるいていました。

この道みちを、おりおり、いろいろなふうをした旅たび人びとが通とおります。

彼かれはさも珍めづらしいように、それらの人ひとたちを見送みおくったのであります。

二郎じろうは、こうして街かい道どうを歩あるいてゆく知らぬ人ひとを見みるのが好すき

でした。

さまざまなことくうを空そう想そうしたり、考かんえたりしていると、独ひとりで

いてもそんなにさびしいとは思おもわなかつたからです。

暖あたたかな風かぜが、どこからともなく吹ふいてくると、乾かわいた白しろい往おうら

来いの上うえには、ほこりが立たちました。

まだ、おそ咲さきのさくらの花はなが、こんもりと、黒くろずんだ森もりの間あいだから見みえるのも、いずれも、なつかしいやるせないような気き持もちがしたのであります。

その日ひも、二郎じろうは独ひとりあてもなく、街かい道どうを歩あるいていました。くるまおと、車の音ねが、あちらへ夢ゆめのように消きえてゆきます。

薬くすり売りかなぞのように、箱はこをふろしきで包つつんで負おつた男おとこが、下したを向むいて過すぎていつてからは、だれも通とおりませんでした。

二郎じろうは、寺てらの前まえの小ちいさな橋はしのわきに立たつて、浅あさい流ながれのきらきらと日ひの光ひかりに照てらされて、かがやきながら流ながれているのを、ぼんやりとながめていました。

彼かれはほんとうに、このときはさびしいと思おもっていたのでありま

す。

ちようど、このとき、奥深い寺の境内から、とぼとぼおじいさんがつえをついて歩いて出てきました。

おじいさんは、白いひげをはやしていました。

二郎は、そのおじいさんを見えていますと、おじいさんは、二郎のわきへ近づいて、ゆき過ぎようとして二郎の頭をなでてくれました。

「いい子だな、独りでさびしいだろう。」と、おじいさんはいいました。

二郎は黙って、おじいさんの顔を見ました。

おじいさんは、たもとのなかから、短い笛を取り出しました。

「この笛ふえを坊ぼうやにやるから、あちらの丘おかへ行って吹ふいてごらん。これはいい音ねが出るでよ。」といいました。

二郎じろうはおじいさんから、その笛ふえをもらいました。

おじいさんの顔かおは、いつも笑わらっているように柔和にゆうわに見えまし
た。

おじいさんは、あちらへつえをつきながら行ってしまいました。

二郎じろうはその笛ふえを持もって、あちらの砂山すなやまにゆきました。

このあたりは海岸かいがんで、丘おかには木きというものがなかったのです。
砂すなの山やまが、うねうねとつづいていました。

そして、暖あたたかな日ひなので、陽炎かげろうが立たっていました。

沖おきの方ほうを見みますと、青あおい海あおが笑わらっていました。

すなやま
砂山の下には、波打ちぎわに岩があつて、波のまにまにぬれ
て、日に光つていました。

そして、翼の白い海鳥が飛んでいました。
笛には、いくつかの小さな穴があいています。

その一つ一つの穴から、吹くと、ちがった音が出ました。

ふえみじかあかあお
笛は短い赤と青とに、その色が塗り分けてありました。

おおあなあ
大きな穴が一つ、小さな穴が五つあいていました。
じろう

二郎がそれを吹きますと、なんともいうことのできないやさし
い、いい音色が流れ出たのであります。

いい音色は、沖の方へ流れてゆきました。

また、うねうねとつづいた灰色の山を越してゆきました。

そして、沖おきの方ほうへいった音色ねいろは、波なみの上うえをただよつたのです。
また、砂山すなやまの上うえを越こしていった音色ねいろは、あちらの空そらに、円まるく
うずくまっていた、こはく色の雲いろくものあるところまでゆくように思おも
われました。

海うみはますます穏おだやかに見みえたのです。

そして日ひの光ひかりは、ますますうらかに輝かがやいたのでした。

あくる日ひもまた、二郎じろうは砂山すなやまの上うえへやってきました。

そして、熱心ねっしんに笛ふえを吹ふいていますと、一つ一つの穴あなから出で
る

ものは、影かげも形かたちもない音ねではなくて、たしかに、いろいろ奇き妙みょう

な姿すがたをした、一人一人ひとりひとりの人間にんげんであるように思おもわれました。

二郎じろうは、目めをつぶつて笛ふえを吹ふいていますと、それらの人ひとたちが

二郎じろうの身みのまわりを取りとまいて、笑わらつたり、話はなしをしたりしているように思おもわれました。

二郎じろうはふいに目めを開ひらいて、その人ひとたちがどんなようすをしたり顔かおつきをしているか、自分じぶんが、たいてい想像そうぞうしたとおりであるかと、見み定さだめようといいたしました。

そして目めを開あけますと、なにもかも消きえてしまつて、ただ砂すな山まに、日ひがぼかぼかとあたつていいるばかりでありました。

このとき、二郎じろうは、ふと沖おきの方ほうを見みますと、そこにはわき出でたように、赤あかい船ふねが青あおい海うみの波なみ間に浮うかんでいたのであります。

二郎じろうは、お伽とぎ話ばなしにでもあるように、美うつくしい船ふねだと思おもいました。

そして、どこからこんな船が、このさびしい港にやってきたの
 だろう……と、それを、不思議に思いました。

二郎は、また、砂山の下を、顔まで半分隠れそうに、帽子
 を目深にかぶって、洋服を着た人が、歩いているのを見ました。
 そして、しばらくすると、赤い船の姿はうすれ、洋服を着た
 人の姿もうすれてしまいました。

二郎は、まるで夢を見ているような心地がされたのでした。
 ふたたび目をつぶって笛を吹きますと、一人一人、異様な形を
 した人間が自分の身のまわりに飛び出して、笑ったり跳ねたり、
 話をはじめるのでした。

彼はふいに目を開きました。

そして、沖おきの方ほうをながめますと、赤あかい船ふねがいつそうはつきりとして、青あおい青あおい、波なみの間に浮うき出でているのでした。

また、笛ふえの穴あなの中なかから飛とびだして、幻まぼろしの中なかに笑わらったり跳はねたりした、異い様ような、帽ぼうし子しを目ま深ぶかにかぶった洋よう服ふくを着きた男おとこも、ほんとうに、砂すな山やまの下したをてくてくと歩あるいているのでした。

二郎じろうは目めを開あけながら、自じ分ぶんは、夢ゆめを見みているのではないかとおも思おもったのでした。

「不思議ふしぎな笛ふえだ。」と、彼かれは、手てに持もっているおじいさんからもらった笛ふえをながめたのです。

砂すな山やまの上うえに、仰あおむ向けになつて臥ねながら、彼かれは、笛ふえを吹ふいてみました。

吹けば吹くほど、いい音色がでて、不思議ないろいろな幻が目に見えたのであります。

二郎はまた、起き上がりました。

そして、笛の穴をのぞきながら、「この穴の中に、なにか小さな魔物でもすんでいるのではないか？」と思いました。

このとき、海の方から、ため息をつくように、軽いあたたかな風が、吹いてきました。

「ほんとうに、不思議な笛だ。」

二郎は、しみじみと、この短い青と赤に塗り分けられた一本の笛に、見入っていました。

その中に彼は、棒きれを持ってきて、笛にあいている穴を、一

つ一つ、つついてみていたのであります。

いくら棒ぼうきれでもつて穴あなをつついても、その中なかからどんな魔物まものも飛とび出だしませんでした。

また、泣なき声こゑをたてるものもありませんでした。

笛ふえの中なかは、ただ一本ほんの空洞うつろの竹たけにしかすぎませんでした。

それでも二じろ郎うは、なお思おもいあきらめることができなかつたので
す。

やはり、一つ一つ無む理りに、穴あなをつついているうちに、その笛ふえは、

ひびがはいってしまいました。

二じろ郎うは、もう一度どいい音色ねいろを聞きこうと思おもつて、その笛ふえを唇ちびるにあ

てて吹ふいてみました。

しかし、笛はもう、なんの音もたてずに、まったく役にたたなくなつてしまつたのです。

海や砂山や、空にかがやいている日の光には、すこしの変わりがなかつたけれど、天地は急におし黙つてしまつて、なにもかも、おしのごとくに見られたのです。

そして、赤い船の影は、波間にうすれて、見えたり、消えたりしていません。

洋服を着た人は、どこへいったか、もうおらなかつたのであります。

二郎は、笛をすてて家に帰りました。

そしてその夜は、後悔しました。

あの大事な笛だいじふえを割わってしまつて、とりかえしがつかなかつたからです。

あくる日ひひるの昼ひるごろ、二郎じろうは砂山すなやまへいつて、昨日きのう笛ふえを吹ふいたところころにきてみました。

するとそこには、いろいろの草くさが、一夜やのうちうちに花はなを開ひらいていたのです。

赤あかい花はな、白しろい花はな、紫むらさきの花はな、青あおい花はな、そして黄きいろ色いろな花はなもありました。

夕空ゆうぞらに輝かがやく星ほしのように、また、海うみから上あがったさまざまの貝かいがらのように、それらの花はなは美うつくしく咲さいていました。

二郎じろうは、ぼんやりと立たつてながめていますと、その中なかの、いち

ばん茎くきの長い赤い花あか はなは、どこかで見た女み おんなの人ひとを思い出おもさずにはいられませんでした。

「どこで、ちょうどこの花はなのような人ひとを見たであろうか……。」
と、二郎じろうはしばらく考かんえていました。

彼かれは、やがてそれを思い出おもしました。

それは昨日きのうの晩方ばんがた、港みなとの方ほうへ歩いてゆくと、町まちの中なかで脊せのす
らりつとした、ほおの色いろの美しい、りっぱな着物きものを着きた旅たびの女おんな
人ひとを見たのでした。

二郎じろうは、足あしもとに咲さいている赤い花あか はなが、風かぜになよなよと吹ふかれ
ている姿すがたが、その人ひとのようすそのままであつたことを思おもつたので
す。

じろう 二郎は沖の方を見ますと、赤い船が、今日も停まっています。
 やはり、夢ではなかつたことがわかりました。
 晩方まで、花の咲いている丘の上で、彼は空想に時をすごしました。

そして、海的面が入り日の炎に彩られて、静かに暮れていった
 時分に、彼は町の方へ帰つてゆきました。

ある果物屋の前で、ふたたび昨日の美しい女の人に出あいました。

彼は思わず顔を赤らめて、その人を見送りますと、

「このごろ、港にはいつてきた、赤い船のお客さまだよ。」と、
 町の女房たちが、うわさしているのをきいたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年5月

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》のお客《きやく》」
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い船のお客

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>